



園だより

5月号

令和3年4月28日
駿河台大学第一幼稚園
園長 田所 恒子

感じることの大切さ

風薫る季節となりました。園庭に年長児が友達と協力して作った鯉のぼりが泳いでいます。その下で、年中・年少児は作った鯉のぼりを手に、先生や友達と一緒に走りながら、全身で初夏の心地よさを感じています。

季候の良いこの時期に3回目の緊急事態宣言が出されました。今回の宣言では「学ぶ権利を保障する」視点から、幼稚園を含めた学校には休園・校をしない方向が示されました。GIGAスクール構想によりICTの設備が進められ一人一台のiPadが配備された小中学校では、オンライン授業も行われるのでしょうか。コロナ禍で小中学校におけるICT活用は一層進むことでしょうか。このような状況に、不安を感じる保護者の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。人格形成の基礎を培う幼児期には、どのような体験や学びが必要かを考えたいと思います。

レイチェル・カーソンは、『センス・オブ・ワンダー』（新潮社）で「知ることは、感じることの半分も重要ではない」と言います。子どもの時代には、神秘さや不思議さに目を見張る感性を授けることが大切であると、自然に触れて感じる直接的な体験の大切さを教えています。幼稚園教育を定めた『幼稚園教育要領』でも、「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さを全身で感じ取る直接的な体験が重要である」と述べています。そしてICT機器に対しては、「子どもたちが興味をもっているように見えるからといって、安易に使用するのではなく、子どもの直接的な体験との関連を念頭に置き、情報機器を使用する目的や必要性を自覚しながら使用することが大切である」としています。幼児期は、間接的・疑似的な体験で知識を得るのではなく、子どもたちが身近な環境に触れながら「もっと知りたい」「面白い」「楽しい」と感じて主体的に取り組む、直接的な体験を通した学びがとても重要になるのです。

今年度、コロナ禍で園外保育の実施が難しいため、本園では、自然に触れることができ場所を近隣で見つれたり、回数を増やしたりして散歩を充実させることにしました。私が同行した年中組の散歩では、タンポポがたくさん咲いていました。既に綿毛になっているものもあり、私は思わず手に取り綿毛を飛ばしました。すると、子どもたちは「わあ！」と驚きの声をあげて、綿毛の行方を追った後、「やってみよう」と真似をし始めました。「綿毛に種が付いていて地に落ち発芽する」という知識よりも、幼児期の子どもには、自分もやってみようという気持ちを抱き、直接手に取り、飛んでいく綿毛の美しさや不思議さを感じ、心を動かす体験を通した学びがとても大切になるのです。

栽培活動もまた、子どもたちの直接的な体験を豊かにする活動です。年長児は栽培したキヌサヤを味噌汁にして食べました。キヌサヤの匂いを感じながら収穫し、指先を使ってスジを取り、春野菜特有の“えぐみ”も味わうなど全身で感じながらキヌサヤの味噌汁を楽しみました。本園では、直接的な体験をもたらす栽培活動を充実させるため、この連休中に、花壇の縁を高くして土を増やすことにしました。今年の栽培活動が楽しみです。

さて、風薫るこの季節は、種まきや苗植えに最適です。ベランダのプランターでも栽培は可能です。心動かす直接的な体験に向けて、ご家庭でも種を蒔いたり、苗を植えたりしてみたいはいかがでしょうか？



年少児は、手に持った鯉のぼりが風に舞う様子や、先生や友達と一緒に走る楽しさを味わいながら心地よさを感じます。



芽キャベツに花が咲きミツバチが集まってきました。蜜を集める様子は子どもの心を揺さぶります。虫が寄ってくるように草花を残しサンショウやミカンの木を植えて自然体験の場を整えています。



年長児が野川へ散歩に行きました。草花を摘んだり、虫を捕まえたりと、野川には子どもたちがわくわく心を動かす出来事がいっぱいありました。



年中児が収穫した葉付きニンジン茹でて調理しました。葉付きニンジンをイメージして盛り付けました。取れたてのニンジンは、香りがプンプンし、とても甘い味がしました。